

論文の内容の要旨

論文題目 保護者との関係構築に関する保育者の語りの検討
—保育者の専門的成長の観点から—

氏名 衛藤 真規

子育てを取り巻く環境は少子化の進展や家族形態の変化を背景に変化し、保育者には専門的業務としての保護者支援が求められている。しかし、多様化、複雑化した課題への対応が求められる保護者支援を、日々の保育とともに行うのは容易なことではない。これまでは、保育者の抱える困難感の分析や、困難を伴う保護者との関係性への対処等、保護者との間にある課題の解決を志向する研究が検討されてきた。しかし、保育の特性や専門性をいかした保護者支援を行うには、保育者と保護者との相互の関係性が構築されている必要がある。また、それは保育者としての経験の短い初任期から求められるいとなみである。そこで本研究では、保護者支援の基盤ともなる保護者との関係構築につき、保育者の専門的成長という観点から検討することを目的とした。

本研究は、全4部10章からなる。第I部では、保護者支援の歴史的変遷として、保育所設立以降の子育てをとりまく環境の変容を示し、保護者支援の現代的課題について述べた。その上で、保育者の保護者との関係構築に関する先行研究を概観し、以下の課題を見出した。第一に、保育者は園という組織の中で経験を積みながら、どう保護者との関係を構築し、保護者支援の力量を形成しているかが明らかとされていない。第二に、保護者との間の困難感に対処することで、保育者がどう専門的成長を遂げているかは示されていない。よって本研究では、①保育者の経験年数、②困難感の対処に伴う保育者自身の変容、③園

内での後輩育成の3点から保育者の語りを分析し、保育者として経験を積む中で、保護者との関係構築に関して、保育者はどう専門的成長を遂げているかを検討することを目的とした。

第Ⅱ部「保育者の経験年数への着目」では、保育者の経験の蓄積に伴う保護者との関係の変容について検討した。

第4章（研究1）では、14名の私立幼稚園教諭を、経験短群8名（経験年数8年未満）、経験長群6名（経験年数8年以上）の2群に分け、保護者との関係に関する語りの違いを比較検討した。保育者の語りから抽出された507事例の分析の結果、保育者の経験年数の増加に伴い、保護者に対する語りの内容には違いが見られた。例えば、経験短群保育者は保護者を難しい存在と捉え、保護者に関わることに困難感を感じると報告していた。これに対し、経験長群保育者には保護者のことを客観視する語りが見られ、保護者の捉え方がコミュニケーションの相手として難しい存在から、共感的にアプローチできる相手へと移行していたことが示唆された。また、保護者に対する難しさの事例分析（33事例）からは、保育者が保護者に対して感じる難しさは、経験を重ねると形を変えていくこと、難しい状況に対処することは、保護者との関係に変化が表れる要因となっていることが示された。

第5章（研究2）では、勤務1年目の私立保育所保育士2名（1歳児、2歳児担当）を対象に、保護者との関係に関しておよそ2ヶ月に1度のペースで3度のインタビューを行った。抽出された114事例に基づき、混乱と成長が認められている初任保育者の保護者との関係構築の特徴を示すとともに、保護者との関係に関する語りの変容プロセスを、困難感に着目して検討した。結果、働き始めたばかりの保育士は、自分から保護者に話しかけるきっかけづくりに難しさを感じており、保護者からの質問への返答に対する困難感はその次に表れていることが示された。また、保護者と双方向の会話が成立することが初任保育者の励みとして語られていた。更に、周囲の保育者には、保護者との関わりを支援してくれる存在と、自分の未熟感や不甲斐なさを感じさせる存在という両義性があることも示唆された。

第6章（研究3）では、7名の中堅保育者（5年目-20年目、私立幼稚園勤務）を対象とした語りの分析により（95事例）、中堅期の保育者の保護者との関係構築の特徴を、保育者の専門的成長の観点から検討した。結果、中堅期の保育者は、子どもの利益、保護者の利益、後輩の利益を園の方針に合わせて考えつつ、場面に応じた工夫をしながら保護者との関係構築をしていることが示された。しかし、相反する子どもの思いと保護者の思いに伴う困難感、保護者の気持ちを尊重しつつ後輩育成をしなければならないという困難感も

語られており、二重性伴う中堅保育者の業務には葛藤があることが示唆された。経験とともに保育者の役割が変わること、より一層保護者の気持ちが分かるようになることを、葛藤の要因として指摘した。また、中堅保育者がこれらの困難感を感じる状況で省察する行為は、保護者との新たな関わり方の獲得という、専門的成長を促す契機となっていた。しかし、保育者が経験を積みながらどう変化し、保護者との関わりに変化が表れるのかは明らかでない。そこで、第Ⅲ部「保育者の変容への着目」では、困難感に対処することで保育者自身がどう変化するかを、プロセスに着目して検討した。また、保護者との関係構築に関する保育者の育成にも焦点を当てた。

第7章（研究4）では、11年以上のベテラン保育者5名（公立幼稚園教諭）を対象とした語りの分析により、保護者との関係変化のプロセスを検討した。難しさに対峙してから、保護者に対する新たな関わり方を獲得するまでの時間的変容に着目し、困難感に対処することに伴う保護者との関係変化を、その要因とともに検討した。結果、5名の保育者の経験の共通点、類似点から、保護者への新たな関わり方の獲得に至るまでを3期に区分し、関係変化に影響を与えていた12の具体的要因とともに、径路のモデル図を描くことができた。また、保護者に対して感じる葛藤後の、保育者の行為の分岐プロセスを示した。葛藤を感じた後の保護者との関わり方には、保護者の多様性を受け入れ一緒に課題を解決していくという直接的な関わり方、保育に専念することで保護者に安心してもらえる環境をつくるという間接的な関わり方の2種があった。

第8章（研究5）では、保護者や同僚との日々の関わりの中で、保育者は保護者との関係に関する価値観をどう変容させているかを検討した。経験11年以上の8名のベテラン保育者（私立幼稚園教諭）を対象に、保護者との関係で記憶しているできごとや大切にしていることを伺い、保護者との関係構築プロセスを、保育者の価値観変容に焦点を当てて検討した。結果、8名の保育者の経験の共通点、類似点から保護者との関係構築に至るプロセスを6期に区分し、保護者との関係が「よい保育者であるために重要な関係」から、「保護者を支援するために重要な関係」へ移行していたことを示した。親を支援するだけでなく、子どもの最善の利益を尊重するための、保護者教育の重要性を意識する語りも見られた。また、20の具体的要因とともに、保護者との関係構築に至る径路を、「保護者の気持ちの理解が深まる」という価値観の変容点とともにモデル図として描いた。更に、困難感の超え方が保育者の保育経験により異なることを示した。初任期のころは、周囲からの助言や支援により困難の解決に向かう。しかし、ベテラン保育者は、難しさを超えた先の自己成長を視座に入れ、困難感への対処を自覚的に捉えていた。

第9章（研究6）では、7名の中堅保育者（5年目-20年目、私立幼稚園勤務）を対象に、

保護者との関係構築に関する保育者の育成の取り組みや課題を伺い、日常的な保育者間での育成の実態を明らかにした。抽出された168事例の分析により、中堅保育者は、困難感を感じつつも自覚的に、信念をもち、工夫をしながら後輩の育成に取り組んでいたことが示された。後輩の育成に伴う困難感には、育成という行為自体の困難感と、精神的な困難感があった。中堅保育者に求められる、「園長—保護者—後輩保育者」間をつなぐ役割に伴う葛藤、見守りと指導の加減をとりながら後輩を育成することへの葛藤等が、精神的な困難感として語られていた。また、後輩の育成における葛藤を超えることが、保育者個人の専門的成長につながっていること、更に園としての保護者との関係構築につながっていることを示した。日常的な後輩の育成とは、後輩とともに保護者に対応することであり、後輩保育者のチーム意識を高めるとともに、園というチームの力を高めることにつながっていた。

第V部「総合考察」では、これまでの研究を通して明らかになったことをまとめるとともに、今後の課題を検討した。本研究で得られた意義は、次の3点である。

第一に、保護者との関わり方、保護者に対して感じる困難感、その捉え方や対処の仕方には経験年数による違いがあることを示した。保護者に対する困難感に対処し省察する行為から、どの経験年数にある保育者も専門的成長を遂げていることが示唆された。

第二に、保育者の保護者との関係構築に至る経験を、時間的変容とともに行為、信念、価値観レベルで捉えることで、保育者の自己変容メカニズムを検討することができた。保育者の経験の積み重ね、保育者の置かれた立場に伴う保護者の気持ちの理解が、保育者の変容を促していた。

第三に、保護者との関係構築に関する日常的な保育者間での育成の実態を明らかにした。後輩の育成には葛藤があるものの、保護者との関係構築に関する後輩の育成は、園というチームとしての保護者との関係構築力を高めることにもつながっている点を示した。

今後の課題として、保護者との関係性に関して同様の方針をもつ園を対象に調査を行うこと、子どもの保育に与える影響を視野に入れること、継続的な調査を行い変化の詳細を検討すること、保育者の役職や施設形態に応じた違いを示すこと、量的研究と組み合わせ、関係構築を複合的に捉えること、特定の保育者に継続的な調査を行うことの必要性が挙げられる。